

平成 24 年度第 8 回小学校ゼミナール記録

2012 年 12 月 20 日(木)

於：広島大学教育学研究科

参加者：小山正孝(広島大学教授), 他 13 名

1. 協議事項

三つのグループに分かれての算数科における授業作りの議論

2. 協議内容

小学校四年生の小数を整数で割る授業に焦点を当て、言語活動の充実を目指した授業作りを最終目標として、今回は事前に授業者により作成された学習指導案を基にして、発表者不在の中で議論がなされた。

まず提示された課題に対して、児童に「予想」させることによって学習意欲を高める効果が期待できるのではないかという意見が出された。そのような授業展開にする場合、前時の授業内容が情報として欠かせないが、資料になかったため、この点に関してはこれ以上の議論が出来なかった。

次に、中央教育審議会答申により提起された「生きる力」の主な二観点(習得型学習による能力・探求型学習による能力)の内、探求型学習となるような授業展開となっているかについて分析された。改善案として等分除と包含除のそれぞれの意味の差異を児童に気付かせ、説明させるために数直線のようなものを二つ教師が提示した上で、児童に問題作りをさせ、更に問題解決をするために立式させ、解答まで求めさせる際に、(除法により)立式したものは二つとも同じであったとしてもその商の立て方はそれぞれ異なることとその理由を児童に説明させることで、言語活動の充実につながるのではないかという考察がされた。

さらに、言語活動を促進する授業展開についても議論が及んだ。言語活動の手段は素朴には、「話す・書く」であろうが、それらの手段を支える目的はむしろ「聴く・視る」によって動機づけられていよう。その意味で、「聴く・視る」は、顕在化はしないけれどもきわめて重要な言語活動の手段である、と考えられる。また言語活動のトリガーとして、「先行する活動の否定」があげられた。「以前には出来たことが出来なくなる」や「以前使えた方法をあえて使わない」といった否定の場面に出会うことで、言語活動の充実が促進されると考える。

最後に今後の課題としては、準備された学習指導案(生徒観や学習過程や扱う教材の意図等)の説明を発表者にしていただいた上で、上述にある議論内容と照らし合わせ、教材の改善等を具体的に行うことでより良い授業作りを行っていくことである。

(文責：福田博人)